

平成15年3月7日（奥田一雄）

教育改革のグランドデザイン策定のための素材

○今日的大学教育のありかたを考えるポイント

- ・カリキュラムからもたらされるものに過剰な期待はしない：大学教育はカリキュラム＋学生活動＋学生生活＋人間関係などの総体ととらえること。
- ・知識の蓄積だけではなく、獲得知識の使い方と実際の活用が同時に必要：学生が自ら学ぶというモチベーションに火をつける。
- ・大学生～社会を築く一員としての現実感と緊張感：線路に乗る→線路を敷く、そのためには何が必要か、道具を提供。
- ・専門性への期待と憧れ：Early Exposure（初期暴露）と実地体験。
- ・アイデンティティ、世界観、多様性の発見とその驚き：自己のポジショニングと帰納的思考法。
- ・自分探し：達成感の実現。

○大学教育の構造

1. カリキュラム・・・教育内容・・・学問体系・・・勉強（基礎）
2. 学びの創造・・・教育方法・・・知識活用・・・経験（応用）
3. キャリア形成・・・教育成果・・・自己実現・・・自信（体得）

- ・1，2，3をリンクさせる仕掛けが最も重要。

○現行の教育実施状況からみた課題

- ・ねらいを明確に設定した5つの教育科目区分からなる4年一貫の学士課程教育を目指したが、実際、共通教育は未だに付け足しになっている（図1）。
- ・このカリキュラムのもともとのデザインは図2のようではなかったか。

- ・デザインどおりになっていない理由は：
 - # 基軸教育（＝専門教育）の発展形がない。
 - # 専門科目が縦割りで、学科・コースごとに固く閉じている。
 - # 教養教育が専門領域を包含する位置づけになっていない。
 - # 基礎教育の重要性が不明確。

- ・その結果、またはこの悪循環の中での原因：
 - # 一回生が暇，3，4回生は超多忙。
 - # 自分の興味をかなえ、能力を伸ばす時期を失う。
 - # 逆に、専門不適応（ミスマッチ）の学生がリカバーできる機会もない。
 - # 学生の般教に対する軽視と苦痛感，専門詰め込み教育への安心感。
 - # 教員の共通教育担当に対する不熱心，専門教育への傾倒。
 - # 学生の学習意欲の喪失とキャリア意識の未形成，教員の無自覚無関心。

○改善の方策

1. カリキュラム

- ・ 基軸教育（言語と情報）を，学士課程を通じて伸ばす。
- ・ 教養科目区分の撤廃。
- ・ 基礎科目を，社会人の普遍的学問知識としてコンパルソリーとする。
- ・ 異分野専門科目の一部（専門コア）の習得をもって従来の教養科目に位置づけ，単位の軽重によって副専攻とする。
- ・ アドバンストコースのためのバイパス設定。
- ・ リカバリーのきく補習的科目の設定。
- ・ 各種資格試験のための授業科目群の設定。
- ・ 専門専攻科目の大幅削減，または大学院修士課程の授業との共用。
- ・ 選択制卒論（主専攻重視，副専攻重視，進学）

2. 学びの創造

- ・ 初年次教育（読み書きパソコン，入門ゼミ＝専門など）の重視と徹底。
- ・ 効果が期待できる科目での習熟度別小人数クラス編成
- ・ 集中授業形式の時間割（1日ぶち抜き，一週複数回）。
- ・ 課題設定・問題解決型の授業・実験実習のパッケージ。
- ・ 自学自習システムの構築と活用。
- ・ 年次完結または学期完結の TBL 形式で行う準卒論。

3. キャリア形成

- ・ 正課教育（の知識）を活かし，学生の自主的なプロジェクト活動や研究調査活動，コンペティションを準正課教育として実践する。
- ・ 大学教育創造センターと連携し，正課教育と準正課教育をリンクさせたカリキュラムを設計する。
- ・ 直接的なインターンシップ活動の成果を準正課教育で応用させる。
- ・ 準正課教育で優秀な成果を収めた学生に **award** を授与する。

○克服しなければならない問題

- ・ 教員の教育負担が増大する。
現行科目を精選し，開講科目数を削減する。

- ・ 集中授業形式の授業実施のために時間割作成が困難となる。
棲み分けを徹底するか，4学期制にする。

- ・ 共通教育委員会の役割と位置づけが大きく変わる。
全学のカリキュラム設計，教育プログラムの企画と授業担当のマネジメントは大学教育創造センターで行う。

- ・ TBL 授業のためなどの学生同士が集まる教室が不足する。
各学科で少なくとも回生ごとの専用教室を用意する。

- ・ 大学学や入門ゼミなどの授業実施方法が大幅に変わる。
担当教員（複数なら2－3名）がテーマと内容を予め提示し，学生に選択させるようにする。

- ・ 準正課教育に携わる教員が必要。
当該教員に対し，正課教育分を削減し，正当に教育評価する。

- ・ 研究活動と成果が縮小する恐れがある。
#

- ・ 医学部の存在
#

○カリキュラム設計のためのアイデアのメモ

- たとえば、大学学と入門ゼミはワンセット、日本語技法と情報処理 II もワンセットで、どちらも週 2 回一学期ぶち抜き。
- 専門基礎（例えば講義・実験セット科目や TBL 授業）、専門英語、専門情報処理などを基軸科目に位置づけ、基軸の発展形とする。
- 英語はプレースメントによる習熟度別少人数クラスで実施、アドバンストコースは週 6 回英語漬け。
- 外国語の自学自習支援は CALLME で行い、外部検定試験対策、国際交流活動などを通した準正課教育によって学生のモチベーションアップを図る。
- 専門英語を担当する学部教員のための教授法や教材開発なども CALLME が支援する。
- 情報教育は課題別またはテーマ別クラス編成で行う。
- 基礎教育は全学学生が全科目必修で、その科目は、哲学（倫理学）、歴史学（地理学）、国語学（文学）、自然科学史（思想史）、数学、生物学とする。現行の概論科目は専門科目へ移行させる。
- 現在の教養教育科目（分野別と主題別）はすべて専門（コア）科目へ移行させ、開講コマ数を削減する（既に専門コア科目があるので、重複内容の授業はこれを削る）。専門（コア）科目を全学に開放し、異分野の学部の学生に選択受講させる（異分野履修は学生が必要と考えているし、外部の評価も高い）。
- 副専攻は必然的に高年次教養教育となる。
- 学科またはコースの縦割り教育システムを廃し、専門科目を厳選して開講授業科目数を大幅に削減するか、隔年開講とする。

ひとまず以上